

# 311子ども甲状腺がん裁判記 ①

白石 草 (ウェブメディア「OurPlanet-TV」代表)

17歳から27歳の若者6人が今年1月、東京電力を提訴した裁判の様子を追います。

「自分は少数派と想っていたけど、こんなに支援してくれる人がいて感謝の気持ちでいっぱいです」

甲状腺がんとなった若者6人が東京電力に損害賠償を求めて提訴した「311子ども甲状腺がん裁判」。若い原告が立ち上がったことに対する反響は大きく、裁判費用を集めるクラウドファンディングでは、1966人から1762万円もの寄付が集まった。裁判を支援するものとしては、歴代2位の金額だという。

クラウドファンディング期間中に実施したオンラインイベントには原告や家族が参加し、感謝の言葉を述べた。ただし顔は出さず、声だけの出演だった。

福島県内では事故から10年間で3000人近い子どもが甲状腺がんと診断されているが、日本政府はそれを被曝の影響とは認めていない。放射線による健康不安を口にするだけで、「風評被害」を招くとバッシングを受ける傾向は今も続く。訴訟を起こした原告が顔を出せない背景には、こうした事情がある。

しかし声だけでも、若い原告たちのみずみずしい言葉から思いは伝わる。がんを診断された時の気持ち。検査や手術の辛さ。提訴にかける思い。まだ高校生の原告も自分の言葉でしっかりと語っていた。

一方、弁護団は提訴からこれまで、最大の争点である被曝と甲状腺がんとの因果関係を立証するために、専門家を招いて勉強会を重ねてきた。150頁を超える訴状ですでに多くの論点から主張を展開しているが、この主張を確たるものとするためだ。福島原発事故による健康被害を問う初の集団訴訟だけに、海外メディアの取材も相次いでいる。5月26日に第1回口頭弁論が行なわれた。東京地裁の法廷を舞台にいよいよ本格的な論戦が始まる。



5月26日に東京地方裁判所で行なわれた第1回口頭弁論。

## 6人の若者のダイアリー

ちひろ (26歳女性、写真も)

裁判に向けて原告同士のつながりを深めようと、4月末に猪苗代でキャンプ交流会を行いました。キャンプといっても、猪苗代はまだ寒いので、貸別荘で1泊するもの。

1日目は天気にも恵まれ、観音寺川の桜を見ながらお昼を食べてスタートしました。夜は屋外でバーベキュー、焼きマッシュマロ、花火、春に誕生日を迎えた原告の誕生会。ギターが得意な中野宏典弁護士が弾き語りをしてくれました。

2日目はあいにくの雨。裏磐梯サイトステーションでお昼を食べ、午後は諸橋近代美術館へ行き、そのあと絵ろうそくを一緒に作りました。

2日間のキャンプはとても楽しく、充実した時間となりました。最初はお互いにぎこちなかったものの、色々なことを一緒に協力して行なうことで、関係が少しずつ深まっていくのを実感しました。

まだまだ多くの困難があるかと思いますが、原告同士が力を合わせて、頑張っていけたらなと思います。

